



東日本大震災から7年を迎えた11日、府内で犠牲者を悼み復興を願う催しや、震災の教訓を生かす訓練があった。それぞれがあの日を決して忘れまいと改めて誓った。

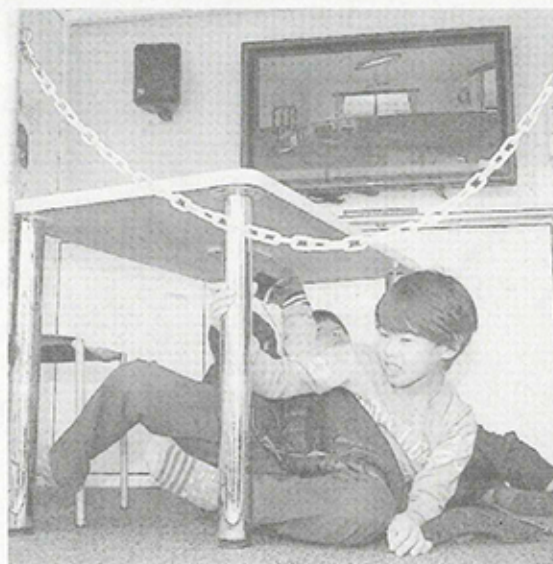
東日本大震災 7年

朝日新聞

丹後・丹波

あの日忘れない

祈りや教訓生かす訓練



起震車で地震の揺れを体験する子どもたち＝与謝野町加悦

北区の上賀茂神社では、被災地から府内に避難してきた人と支援者計13人が参拝。同神社は「電気産業の守護神」とされる賀茂別雷神を祭っていて、震災の2日後から毎日、被災地の

復興と原発事故の収束を祈願し続けてきた。福島県いわき市から子ども2人と避難してきたパート長谷川沙織さん(35)は伏見区は「ふるさととは大切だけれど、事故は収束していない。本音は帰りたいけれど、帰れない」と話す。同県郡山市からの避難者、主婦榎美子さん(65)は西京区は「これまで涙を流すこともあったが、この1年

でだいぶ心が落ち着いてきた」と心境の変化を打ち明けた。

中京区の立命館大朱雀キャンパスでは犠牲者を追悼し復興を考える「いのちのつどい」が開かれ、同大学や付属高校の学生と生徒による被災地支援の活動報告があった。

学生団体「そよ風届け隊」は福島県楢葉町で住民インタビューに取り組んだり、京都での映画上映会などを通じ被災地の様子を伝えたりする活動を紹介した。代表の法学部2年吉村大樹さん(20)は「自分たちの活動がない方が復興が進んでいることになるから、本当はない方がいい。でも必要とされるならば地元の人々の声を聞きながら続けていきたい」と話した。

与謝野町では全町民を対象に地震発生を想定した訓練があった。8088人が

自分たちが住む地域の避難所に移動し、震災時の避難の手順を確認した。

同町加悦の加悦中学校では起震車による地震体験や陸上自衛隊福知山駐屯地の隊員による炊き出し訓練、日本防災士会府支部によるポリ袋クッキングの実演などもあった。

ポリ袋で湯煎したカボチャやリングを試食した加悦小5年の森垣祥太君(11)は「思ったよりもやわらかくておいしかった。地震はいつ来るかわからない。いつも心づもりをしておかない」と話した。

(本多由佳、寺脇毅)